山と書くな
－壮族の古壮字と日本の訓仮名をめぐって－

A Comparative Study on the Succession of Character Cultures on the Zhuang and the Japanese: On “Ko-So-Ji” and “Kun-Kana”

京都先端科学大学人文学部教授
手塚恵子 TEZUKA, Keiko

問題の所在

「それは違う。山と書くな。」

レコーダーのスイッチはオンになっていたので，私は聞き書きの内容をノートに走り書きしていた。やわらかい陽光ののどかな日だった。蒋宏が近くの村の背後にある山について話し始めたので，私はノートに「山」と書いた。後で録音を聞き直すための録音データのインディックスというつもりでノートを書いていたので，「山」は少し大きな字であったかもしれない。

蒋宏の声は明らかに，いらだっていた。驚天動地。私は崩れるような衝撃を受けた。ノートは壮語で取れということか。いや違う。「同じ武鳴県でも双橋と東部では発音が違うから，本当のところは現代壮文（注 1）は使いづらい」と言っていたから。古壮字で書けということか。いや違う。私の古壮字のレベルを誰よりも知っている人なのだから，そんな無謀な要求はしないはずだ。

「山というのは漢族のところにあるものだ。あなたも登ったことのある泰山は山だ。ここらあたりにあるものは，それとはちがう。それを山と書くことはできない。」

村の背後にあったのは，小ぶりの岩肌の露出した山だった。小ぶりといってもそれを岩というのには大きすぎた。広西は石灰カルスト地形であり，内部に鍾乳洞を持った小ぶりの山が平地に唐突に屹立している。それを壮語でビャーという。

「それがビャーということは知っています。確かにビャーと漢族の山は同じではないと思います。これは私のメモで，公開するものではありません。私はこのノートを日本語で書いています。日本では山の読み方は二通りあります。サンという読み方は漢語のシャンからきたものです。泰山はタイサンです。これとは別にヤマという読み方もあります。ヤマと聞くと私の故郷の小さななだらかな山を思い浮かべます。漢族の山を思い浮かべることはまずありません。ヤマにはこの他に，概念として，どの山にも個別化されないものとしての意味もあります。私がノートに書いた山は漢語の山ではなく日本語のヤマです。」

「違うものを同じにはできない。」

「武鳴県には大明山があります。高くて深い山です。漢族の山に似ていると思います。これはどう書くのですか。」

「ドゥーシャン（土山）と書く。」

蒋宏は呆れたような，哀れむような表情を見せると，ぷいと部屋を出て行った。

壮語には，広西壮族自治区各地で，千年以上伝承されてきた壮語の書き言葉「古壮字（方塊字）」

がある。

漢字系文字には，①漢字をそのまま使用する段階，②新しい文字をつくる段階，③別系統の文字を使用する段階があるが，仮名は漢字を変形させてその民族語に適応させたもの（②－1）であり，古壮字は漢字の構造原理を利用し新しい文字を作ったもの（②－2）である（河野 1994）。②に分類される文字で，現在も通用するものはごく僅かである。古壮字は，日本の仮名と並んで，現在も通用する代表的な②型の漢字系文字である。

蒋宏の書く壮語の文は漢字と古壮字から構成されており，私の書く日本語の文は漢字と仮名でできていた。漢字「山」を巡る対立は，私たち個人に由来するものではなく，漢字を巡る古壮字と仮名の立ち位置の違いにあった。

古壮字の歴史

広西には秦代に桂林郡が置かれた。漢族による治政の始まりである。桂林から出土した 470 年に作られた地券（「欧阳景熙地券」『石语墨影 广西古代石刻选萃』）には，「亡人以銭万万九九百九文買塚地」（死者は万万九九百九文の銭で塚の土地を買いました）と記載されている。少なくとも五世紀の桂林では，漢字で文章を記述した文書（石刻）を作るようになっていたのである。

壮族は古くは文字を持たなかったが，漢族との接触を通じて民族文字を作り始める。永淳元年（682 年）に，上林県の韋氏が居宅に建てた「六合堅固大宅頌碑」（『壮族文学史』p.372）に刻まれた文字はその一例である。碑文は漢文で書かれているが，その中に非漢字文字が用いられている。例えば碑文の一文「𥟖桑滋耽　耕農尽力」（田や桑畑は見渡すかぎり繁っている。農耕に力を尽くそう）には，八文字中七文字（「桑」「滋」「耽」「耕」「農」「尽」「力」）に漢字が使われているが，文頭の文字である「𥟖」という字は漢字には存在しない。一方で「𥟖」は壮族の古壮字に含まれ，田という意味で現在も使われている（覃 2010 p.38）。「六合堅固大宅頌碑」には同様な事例が複数みられることから，「六合堅固大宅頌碑」が刻まれた唐代には，すでに古壮字が使用されていたと考えられている。

宋代になると古壮字は，公文書，訴状，証書，契約書などに使用されるようになった。1173 年に静江府（広西壮族自治区桂林市）に副知事として着任した范成大（1126-1193）は，「遍遠俗陋　牒訴券約専用土俗書　桂林諸邑皆然……余閲読訴牒二年　習見之」（遠方の野卑な風俗では，公文書，訴状，証書，契約書には専ら土俗の書を用いている。私は訴状や公文書を二年読み調べ，これを学習した）（范成大『桂海虞衡志』）と記している。

壮語は漢語ではなく広義のタイ語である。タイ，ラオス，中国南部におけるタイ系諸語の分布は，かつて中国南部に居住していたタイ系諸民族が，中原からの漢族の進出によって，西側に押し出されたことに関連づけられている。壮族の居住地である広西（現在の広西壮族自治区）はタイ系言語の分布の東端に位置している。

壮語は古くから漢語の語彙を受け入れてきた。その一方で語法上ではタイ語の枠組みを維持している。最もそれが顕著なのが，修飾語と被修飾語の関係である。壮語では修飾される語は，それを修飾する語よりも前に置かれる。例えば漢語で「泉の水」は「泉水」であるが，壮語では raemx（水）mboq（泉）となる。タイ語と漢文は語法的上では共に主語，述語，目的語という語順を持つが，修飾語と被修飾語の関係が異なるために，古壮字が使われているだけでは，壮語の文とはいえないのである。

『桂海虞衡志』には古壮字の使用が記述されているが，「牒（公文書）」「訴（訴状）」「券（証書）」「約（契約書）」の現物が伝来していないので，「六合堅固大宅頌碑」の例のように古壮字が漢語の文章のなかに単独で使用されていたのか，それとも古壮字を用いて壮語の文章を記述したものなのかを，窺い知ることはできない。

現存する古壮字文書と直接繋がりがあると考えられるのは明清時代の書物や文書である。明末清初に広西で収集された民歌を纏めた李調元（1734-1803）撰の『粤風』には，壮族の歌謡様式に従った三十六首の壮歌（俍歌および僮歌）が収録され

ている。この壮歌は壮語で書かれている。西脇（西脇 1983）によれば，俍歌における古壮字の比率は 59 パーセント，僮歌では 57 パーセントである。『粤風』所載の壮歌は，古壮字によって表記された壮語の歌として，漢籍に収められた最も古いものとされている（胡 1982　梁 2012）。

むろん，漢籍に収められていない，在地で伝承されてきた古壮字文書も各地にあったと考えられる。按察使司副使として，康熙年間（1662 ～ 1722）に広西に赴任した陸祚蕃は「狼之為歌五言八句　唱時叠作十二句……但其中土字土語　十常八九不譯而翻之不能曉也」（壮族は五言八句の歌を作り，唱うときは重ねて作って十二句にする。……但しその中の土字や土語は十中八九理解できないし，翻訳してはっきりわかるようにすることはできない。）（『粤西偶记』）と記している。この記述から，壮族の人々が壮歌を古壮字で記述していたこと，うたうときには五言十二句としてうたい，それを記述するときには五言八句として書くという，現在用いられているのと同じ方法（注 2）で壮歌を記述していたことがわかる。

現存する古壮字文書のなかで，書写日の記載があり，かつ最も古いものは，嘉慶十八年（1813）に書かれた民間宗教の祭文の「麽経抄本」（『壮族麽经布洛陀影印譯注』）である。壮歌や宗教祭文などは，それ以前より代々書写，作成されてきたと考えられているが，書写日を記載している文書がごく少ないこともあって，古壮字の在地文書の最も古いものがいつ頃書かれたかのを知ることは難しい。

現在では農村で清朝以前に作られた古壮字の文書を見ることはまずないが，古壮字の文書そのものは，民国期までは農村部では珍しいものではなかった。その後の撲滅と隠匿の時代を経て二十世紀末までは，書写したり書き起こしたりして，古壮字文書は作り続けられた。村で暮らしていく上で，必要なものとして，古壮字はあったのである。

古壮字の構造

漢語を表すための文字が漢字である。漢語は原則として単音節で一語を表す言語である。漢字は一文字で単音節の語を示すものとして運用されてきた。漢字は一字一字が各々固有の意味と音を持っている。漢字は表語文字である。

壮語は広義のタイ語であり，漢語とは異なる言語であるが，単音節であるところは共通している。古壮字は漢字を手本に創られたので，基本的には，単音節で一語を表す表語文字である。古壮字の字体は漢字の造字法である六書を基本原理として作られている。

古壮字の字体の類型については，諸説があり，まだ確定していない。筆者は古壮字の類型を自作文字，借用文字に分類し，その下にそれぞれ四類型をおく八類型を提案している。筆者案は，自作文字に属するものとして象形，指示，会意，形声の四類型を，借用文字として次の借音，借義，借音義，借形の四類型を置くものである。

象形　具体的な事物を簡略に写したものである。例えば古壮字の「丬」は杖をつく人の姿を表したもので，「杖」という意味を表している。

指示　抽象的な事物を表すもの。例えば古壮字の「3」は「坐る」という意味を示している。

会意　漢字二字を意符として組み合わせて，新たな字を作成したものである。例えば古壮字の「歪」は「天」と「上」を組み合わせたもので，「上方」という意味を示している。

形声　漢字二字のそれぞれから意符と声符を借りて，新しい文字を作成したものである。例えば古壮字の「𠯑」は意符である「出」と声符である「悪」を組み合わせたものである。「出る」という意味を持ち，o:k^{5} とよむ。声符に「悪」が選択されたのは，漢字「悪」の上古音の発音が ʔak であり，壮語の「出る」の発音である o:k^{5} に近接しているためである。

借音　壮語を漢字の音を借りて表すもの。仮借あるいは万葉仮名の音仮名的な用法である。例えば「丕」という漢字の上古音の発音は p^{h}iəg であり，その音が壮語の「行く」の発音 pa:i^{1} に類似した音を持つことから，「行く」という意味を表すときに，漢字「丕」を使うのである。

借義　漢字の字義を借りるが，それを壮語で発

音するものである。例えば漢字の「家」に相当する語を壮語で ɣaːn[1] という。そこで漢字の「家」を ɣaːn[1] とよむことで，壮語の「家」という意味を表すのである。万葉仮名の訓仮名的な用法である。

借音義　漢字の意味と音を共に借りたものである。漢字「嫁」は嫁ぐという意味を持ち，上古音の発音は kɔ である。古壮字では「嫁」を ha_{35} とよむ。漢字から意味と音を借りた例である。

借形　漢字の一部を取り去ったり，付け加えたりしたものである。古壮字の「旃」は漢字「有」の一部を欠落させたものを並べたものである。「有るべきものがない」ことから「無い」あるいは「～でない」という意味になる。

在地で伝承されてきた古壮字文書は，これらの八類型の古壮字を使って，記述されている。古壮字は漢字の素養のある者にとっては理解しやすいものではあるが，習得は簡単ではない。上述したように，官僚であり南宋を代表する文人でもあった范成大にとっても「之を見て習う」必要があった。古壮字を理解するのは，容易ではなかったのである。

古壮字で記述された文書

古壮字で記述された文書には，公文書，訴状，証書，契約書といった公の文書の他，碑，唱本，手紙などがあるが，現存しているものの大半が唱本である。唱本は主として宗教者の所持するものと俗人の所持するものに大別できる。

広西には経典や祭文を所持し祭祀や儀礼を行う司祭型の宗教者と，それらの文書を所持せず，主として占いや祈祷を行うシャーマン型の宗教者が活動している。司祭型の宗教者には，仏教の僧侶，道教の道公，民間宗教の師公，麼公があるが，古壮字の唱本を使って宗教活動を行うのは，師公と麼公である。

「造文字暦書」は，『吆兵全巻』（『壮族麼経布洛陀影印譯注』）所収の「造文字暦書」の一部分を抜き書きしたものである。『吆兵全巻』は，十四章から成る祭祀に用いられる祭文である。「造文字暦書」はその四章目にあたり，まだ人間が文字や暦を知らなかった時代，人は物事を為すにあたって吉日を選択できず，その為に災禍が続発していた。それを螟虫や蚜虫が哀れんで，紙の上に這い出て文字を作り，年月や時間の仕組みを定めた。人はそれらの紙を重ねて書物を作り，天下を治めるようになったと述べるものである。

『吆兵全巻』を所持していたのは巴馬瑶族自治県燕洞郷洪晩村の壮族の男性で，麼公であった彼の父親が残したものであった。文書の扉に「民国二年……録」と記述されていたことから，書写年は 1913 年と考えられている。

さて「造文字暦書」は，その一句が五字で構成された韻文である。第一句の五番目の語である「開 haːi[1]」（Ⅰ -1 － E）と第二句の三番目の語である「去 pai[1]」（Ⅱ -1 － C）で韻 ai[1] が踏まれている。第

造文字暦書

		A	B	C	D	E
Ⅰ	1	九	吃	皇	造	開
	2	Guj	haet	vuengz	caux	hai
	3	ku[3]	hat[7]	vuəŋ[2]	çaːu[4]	haːi[1]
	4	借音義	自形	借音義	借音	借音義
	5	九	早	王	才	打開
	6	九早王がようやく開けると				
Ⅱ	1	蟶	来	去	来	罵
	2	Nengz	laih	bae	laih	ma
	3	neːŋ[2]	laːi[6]	pai[1]	laːi[6]	ma[1]
	4	自形	借音	借義	借音	借音
	5	虫	爬	去	爬	来
	6	虫が這いずりながら行ったり来たり				
Ⅲ	1	成	字	大	特	忐
	2	Baenz	sw	daih	dwk	gwnz
	3	pan[2]	ɬɯ[1]	taːi[6]	tɯk[7]	kɯn[2]
	4	借義	借音義	借音義	借音	借義
	5	変成	字	大	放	上面
	6	大きな字になったものは上の方に放し				
Ⅳ	1	成	字	閔	初	忑
	2	Baenz	sw	mwnh	coq	laj
	3	pan[2]	ɬɯ[1]	mɯn[6]	ɕo[5]	la[3]
	4	借義	借音義	借音	借音	借義
	5	変成	字	小	放	下面
	6	小さな字になったものは下に放しました				

１は古壮字，２は現代壮文，３は IPA（数字は声調を示す），
５は古壮字に対応する中国語，６は和訳である。
４には古壮字の類型を示した。
１２３５は『壮族麼経布洛陀影印譯注　第一巻』（広西民族出版社 2004 年）による。

三句の五番目の語「忐 kɯn^{2}」（Ⅲ -1 ― E）と第四区の三番目の語「閔」mɯn^{6}（Ⅳ -1 ― C）でも韻 ɯn が踏まれている。このような押韻の様式は「腰脚韻」とよばれ，広西では広く見られるものである。

この韻の踏み方から考えると，第一句と第二句で一連，第三句と第四句で一連を構成しているとみることができる。この文は「九旮皇造開，蝏来去来罵」「成字大特忐，成字閔初忑」と唱えられていたと推察できるだろう。

師公や麼公の祭文は師匠から弟子に伝承されるものである。弟子は師匠から祭文を譲られる場合もあれば，師匠の祭文を借り受けて書写する場合もあった。祭文は門外不出のものであり，俗人に譲渡されることはない。

俗人にとって唱本といえば，掛け合い歌を記述した歌本である。広西では春と秋に即興で歌を掛け合う祭があり，また冠婚葬祭にも歌の掛け合いは欠かせないものであった。掛け合いでうたわれる歌の内容には制限はなかったが，比喩歌と故事歌が特に好まれた。比喩歌は即興性が強く，古壮字で書き残される機会はそれほどなかった。それに比べて故事歌は物語の荒筋が共有され，詞章についても伝承される傾向が強かった。

「梁山伯祝英台」は 1993 年に武鳴県羅波街でうたわれたものを筆者が録音し，それを蒋宏，韋使花，韋星朗と共に書き起こしたものの一部を抜き書きしたものである。うたわれるのに先だって，蒋宏と韋使花は，羅波街の識字教育を受けていないおばあさんの諳んじている壮歌を録音しノートを作って歌い手に示した。この「梁山伯祝英台」唱本は，口承から書承，書承から口承，口承から書承へと伝承され，作成された歌本である。

「梁山伯祝英台」は，漢族から伝わった物語である。広西では散文ではなく，掛け合い歌として広まった。現在でも最も人気のある故事歌である。物語の概要は次のようである。

梁山伯は羅山の学堂へ進学しようとしていた。女が学堂へ行くことは認められていなかったが，祝英台は家には他に男子がないので，男装して進学することにし，山伯に同行することにした。山伯の家庭は貧しかったが聡明で，常に英台の勉学を助けていた。英台も何かわからないことがあると山伯に尋ねるようになり，いつしか山伯に恋愛感情を持つようになった。英台がまだ卒業しないうちに，欲に目がくらんだ父親が，英台を大金持ちの馬氏の息子に嫁がせることにし，重病であると偽って，英台を実家に呼び戻した。事の真相を知った山伯は恋煩いから病を発し死んでしまい，その墓は十字路に造られた。英台の花嫁行列がその場所を通りかかり，英台が墓に詣でると俄に天がかき曇り，雷雨が降ると墓が開いたので，英台はその中に飛び込み共に埋葬された。

さて「梁山伯祝英台」は一句が五字で構成された韻文である。第一句の五番目の語である「𠱓 ta^{1}」（Ⅰ -1 ― E）と第二句の三番目の語である「妃 pa^{2}」（Ⅱ -1 ― C），で韻 a が踏まれている。さらに第二句の五番目の語である「体 ti^{3}」（Ⅱ -1 ― E），

梁山伯祝英台

		A	B	C	D	E
Ⅰ	1	旬	话	尼	所	𠱓
	2	coenz	vah	naex	soj	da,
	3	ɕon^{2}	ɯa^{6}	nai^{4}	θ o^{3}	ta^{1}
	4	借音	借音義	借音	借音義	自形
	5	句	话	这	所	摆
	6	このような話は捨て去るべきもの				
Ⅱ	1	勐	伝	妃	否	体
	2	gaeuj	hunz	baz	mbaeuj	dij,
	3	kau^{3}	hun^{2}	pa^{2}	bau^{3}	ti^{3}
	4	自形	自形	自形	借音義	借音
	5	看	人	女	不	值
	6	人として見れば，女は値にはない				
Ⅲ	1	重	男	只	轻	女
	2	cungq	namz	cix	gingh	nij,
	3	ɕuŋ^{5}	na:m^{2}	ɕi^{4}	kiŋ^{6}	ni^{3}
	4	借音義	借音義	借音義	借音義	借音義
	5	重	男	又	轻	女
	6	男は重く女は軽いなどと				
Ⅳ	1	岜	𡢃	甦	否	从
	2	byaeuq	dai	lix	mbaeuj	coengz
	3	pjau^{5}	ta:i^{1}	li^{4}	bau^{3}	ɕoŋ^{2}
	4	借形	自形	自形	借音義	借音義
	5	即	死	活	不	从
	6	たとえ死のうとも従うことはない				

1 は古壮字，2 は現代壮文，3 は IPA（数字は声調を示す），
5 は古壮字に対応する中国語，6 は和訳である。
4 には古壮字の類型を示した。

第三句の五番目の語である「女 ni[3]」(Ⅲ -1 ― E)，第四句の三番目の語である「甦 li[4]」(Ⅳ -1 ― C)で，韻 i が踏まれている。

この韻の踏み方から，一首を第一句から第四句の四句で形成しているとみることができる。この押韻の様式も「腰脚韻」であるが，祭文「造文字暦書」に比べると，より複雑な踏み方になっている。この歌のように，五言四句で二種類の韻を腰脚韻で踏むものを「四句腰脚歌」といい，広西中北部地域で標準的な歌の様式になっている。

掛け合い歌の愛好者のなかには，あちこちの掛け合い祭に出かけて故事歌を書き取ったり，他村で伝承されている歌本を書写したり，またそれを皆で持ち寄ってより優れた表現の歌本に編集したりする者がある。掛け合い歌は同じ旋律圏に属する者にしか理解できないので，歌本の流通は旋律圏内に限られるが，それでも祭文に比べれば，広範囲に享受され得るものである。

祭文にせよ歌本にせよ，唱本は「うたったものを記述したもの」であり「うたうための備忘録」である。それでは手紙はどうであろうか。広西では好きになった女の子に恋文を渡す習慣があった。人伝いに渡したり，後には郵便で送ったりした。次の文は 1940 代に書かれた恋文である。

朵花红困因　种歪顶高楼
馱星元想欧　為条欧兄頂
花がひとつ赤くてらてらと
高楼の頂に咲いている
妹よ手に取ろうと思うのだが
私の鈎は短すぎる

この恋文もまた五言四句で二種類の韻を腰脚韻で踏む四句腰脚歌である。記録のために書くのではなく，相手に読ませるために書く文も，散文ではなく韻文であった。地元では恋文のことを「字歌」と呼んでいる。

日本語の表記の変遷

現代の日本語の文章は，漢字，平仮名，片仮名，ローマ字，英語などが混在して記述されている。また記述されるジャンルも，小説，詩歌，エッセイ，法律，行政文書，教科書，論文，新聞，マニュアル，SNS など多岐にわたっている。これら現代日本語の表記の基本になっているのは漢字平仮名交じり文であるが，その様式が完成したのは近世になってからである。

古くは日本は文字を持たなかった。中国から渡来した物品に刻まれた文字（漢字）は呪術的なものとして受容された。受容にあたっては表語文字である漢字の一字一字が持つ意味が必ずしも理解されていたわけではなかった。

表語文字としての漢字を受容し，さらに漢字で書かれた文章を読み書く必要に迫られた当時の人々は漢語の読み書きができ，日本語にも通じている人材を朝鮮半島に求めた。朝鮮半島では日本に先んじて，母語とは言語系統の異なる漢語の文章を理解し，漢語で文章を書く技法を確立していたのである。

渡来人の指導のもと，漢語による読み書きができる人々が増えるにつれて，正格の漢語文章ではなく，日本語の語順で漢語を記述する文章（変体漢文）が書かれるようになった。また中国古典籍や仏典を読解するために，漢語文章に訓点を付けること，それを読みくだす漢文訓読も行われるようになった。漢語と日本語では語法が異なる。漢語は語順が主語，述語，目的語であるのに対して，日本語は主語，目的，語述語となる。漢語には活用語の活用語尾や助詞がないのに対して，日本語にはそれらがある。変体漢文や漢文訓読は，漢語が日常的に話される環境のない地で，漢語文章を学習したり，作成したりするために生まれた工夫である。これらの工夫は日本だけではなく，漢語を受容した他の地域でも見られた技法であった。

一方で，表語文字である漢字の表音的，表意的機能を分化して用いることによって日本の語を記述する試みが始まった。万葉仮名の誕生である。

表語文字である漢字は，漢字一字ごとに漢語による発音と意味を持っている。万葉仮名のひとつは，「山（やま）」を表すのに「也麻」と書く方法であり，日本語の音節を表すために，漢字は使用するが，漢字の意味は用いないで，発音だけを借りて記述するという技法である。これを音仮名と

いう。いまひとつは，高い建物を表すのに，「高屋」と書いて「たかや」と読む方法であり，漢字の意味を用いるが，発音はその漢字の意味に該当する日本語をあてるという技法である。これを訓仮名という。このような漢字の表音的あるいは表意的機能を使って母語を表記しようという試みは日本だけではなく，漢語を受容した他の地域でも見られた。当初，音仮名と訓仮名は厳密に区別されていたが，やがてその区別を失い，漢字の音や訓を意識することなく，特定の音節を表す文字となった。

その後，実用的な用途に万葉仮名が多用されるようになると，書きやすい記述の方法が求められ，万葉仮名を草書に書き崩す草仮名が生まれ，さらにそれが簡略化されて平仮名となった。

また平仮名の誕生にやや先んじて，訓点として付された万葉仮名が，漢字の一部分のみを使用するという方法で簡略化され，片仮名となった。

平安時代になると，日本語を表す表記法は，漢字片仮名交り文，平仮名文に収斂していく。その後，漢字片仮名交り文の片仮名が平仮名に置き換わった。また平仮名文のなかに漢字が用いられるようになり，その比率が大きくなっていった。このような経緯を経て，漢字平仮名交り文が誕生し，近世になって完成した形を見せるようになった。

「造文字暦書」と「梁山伯祝英台」における形声字

「造文字暦書」（図 1）には，借音義の字が六字含まれている。「九」「皇」「開」「字」「大」「字」である。借音義とは漢字の意味と音の両方を使用する方法である。端的にいうと，漢字をそのまま使用することである。二句目（Ⅱ）には借音義の字はないが，それ以外（Ⅰ）（Ⅲ）（Ⅳ）には，各々二字もしくは一字の借音義の字が含まれている。

「造文字暦書」には，借音義の字以外にも，十二字の漢字が含まれている。「造」「来」「去」「来」「罵」「成」「特」「忐」「成」「閔」「初」「忑」である。このうち借義（漢字の字義を借りるが，それを壮語で発音するもの。万葉仮名の訓仮名的な用法）として使用されているのが，「去」「成」「忐」「成」「忑」である。

借音義と借義の古壮字は，漢字文化圏に属する者には，見れば理解できる字である。「大」は「大（ダイ）」であり，「成」は「成（なる）」である。日本の常用漢字にはない「忐」でさえそれが「上」を示していると推察するのはそれほど難しいことではない。あなたが扉の前で，壮族の人に「去」と書けば，壮族の人は扉を開けてくれるだろう。表語文字である漢字の持つ二機能のうち，意味を表す機能は，書くことによって，個々の言語文化を越えていくことができる。

一方，借音（壮語を漢字の音を借りて表すもの，万葉仮名の音仮名的用法）には，それができない。「造文字暦書」には，借音として使用されている文字が五字ある。「造」「罵」「特」「閔」「初」である。同じ漢字文化圏に属している者であっても，これらの文字の意味を推測することは難しい。「罵」を「来る」という意味で理解することは，日本の言語文化のなかでは困難である。他方，漢字文化圏に属する者は「特」の字の持つ意味を知らなくとも，「特」を d^{h}ək に近接した音で発音することはできる。あなたが壮族の人の前でガラス瓶を持ち d^{h}ək と発音すれば，あなたの意図がどうであれ，壮族の人はあなたが手に持ったガラスの瓶を受け止めようとするだろう。twk[7] は壮語で「放す」という意味だからだ。表語文字である漢字の持つ二機能のうち，音を表す機能は，声に出すことによって，個々の言語文化を越えていくことができる。が，そこには意思の疎通はない。

壮族の言語文化は漢族と同一ではないから，漢字のみで壮語の文を構成することができない。壮語を書き表そうとして，表語文字である漢字の表意的機能と表音的機能を切り分けて文字に与えたが，使われている漢字が借義で使われているのか借音で使われているのか，判断に迷うところがあった。この混乱を回避する方法として，壮語の言語文化が選択したのが形声字である。

「造文字暦書」には，形声字が二字含まれている。「吃」「蟶」である。

「吃」は「日」と「乞」という漢字から構成さ

れている。「乞」は，古音で k^{h}iət 粤語（注 3）で hɐt と発音する漢字である。壮語には k^{h}iət もしくは hɐt 音を持つ語はなく，近似音として hat 音を持つ語がある。hat には「モグラ鼠」,「（建築物を）造る」,「早朝」の意味がある。「吃」を構成するもう片方の字である「日」は，漢字では時間に関する部首である。

「日」とのみ書いてあれば，時間に関するものであるということはわかるが，それ以上はわからない。「乞」とのみ書いてあれば，「早朝」なのか「モグラ鼠」なのか「造る」なのか選択の余地がある。「日」と「乞」を併せて書くと，時間に関する hat に限定され，間違いなく，「早朝」と理解される。

「蟶」も同様である。「寧」は，古音では neːŋ 粤語で neŋ と発音する漢字である。壮語の neːŋ には「虫」という意味の他に，「引っぱる」という意味がある。「蟶」を構成するもう片方の字である「虫」は漢字では虫に関する部首である。「虫」「寧」を併せて書くことによって，「蟶」は虫に関する neːŋ に限定される。

この二例の古壮字は，古壮字一字の中に，漢字の部首を意符として用いて，音府の表す範囲を限定している例である。意味の上でも音の上でも，より正確な表現を実現しようという努力の現れであろう。

「梁山伯祝英台」には，借音義の字が十字，借音字が三字，形声字が六字，借形字が一字含まれている。「造文字暦書」の借音義の字は六字なので，「梁山伯祝英台」の借音義字の多さが目につくが，これは「梁山伯祝英台」の三句目（Ⅲ）に，「重男軽女」という漢語の四字熟語を取り入れているからである。それ以外（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅳ）では，借音義字は二字もしくは一字である。借音義字の比率は，三句目を除けば，「梁山伯祝英台」と「造文字暦書」で大きく変わることはない。

「梁山伯祝英台」と「造文字暦書」で大きく変わるのは，借音字，借義字，形声字の字数である。それぞれ次のようになる。借音字（梁 3，造 8），借義字（梁 0, 造 5），形声字（梁 6, 造 2）である。二本のテキストの字の類型別比を見てみると，「梁山伯祝英台」の借音字と借義字が（3 ＋ 0）字，「造文字暦書」の借音字と借義字が（8 ＋ 5）字であり，「梁山伯祝英台」の形声字は 6 字，「造文字暦書」の形声字は 2 字である。借音字プラス借義字が，形声字とトレードオフに近い関係にあると推察できよう。「梁山伯祝英台」では借義字は使用せず，その代わりに形声字を使用している。「梁山伯祝英台」における形声字の使用は自覚的である。

「梁山伯祝英台」に用いられている形声字は「䟦」「軌」「伝」「妃」「毙」「甦」の六字である。このうち，「伝」と「妃」は，「造文字暦書」における形声字のあり方と同様に，古壮字一字の中に，漢字の部首を意符として用いて，音符の表す範囲を限定している例である。

上記の二例と類似する構成法を取るのが「䟦」である。「䟦」は「巴」と「他」から構成されている。音符である「他」は上古音で t^{h}a，粤語では ta である。壮語の ta には，「目」「母方の祖母」「若い女性を数える量詞」「河」「打ち砕く」など多くの意味がある。意符として用いられている「巴」は古壮字では「手」という意味を持つ。手に関連する ta として「打ち砕く」が選択される。「他」と「巴」を併せて書くことによって，ta の意味が絞り込まれる。「造文字暦書」では意符は漢字の部首であったが，ここでは意符は部首ではなく，古壮字の字である。

この構成法をさらに進めたのが，「軌」「甦」「毙」である。「甦」は「台」と「死」から構成されている。音府の「台」は上古音 t^{h}əg，粤語で t^{h}ɔːi である。壮語の tai には「母方の祖母」,「死ぬ」,「継承する」,「大きい」,「濾す」などの意味がある。「甦」は音符を表す壮語の意味を意符によって限定するという方法ではなく，意符に漢字「死」を直接用いて意味を表わしている。

「造文字暦書」と「梁山伯祝英台」のテキストの差異は，書かれた時期（1913 年，1993 年）と文書の種類（祭文，歌本）である。借義字と形声字のトレードオフに関して，書かれた時期による差異については他の資料と比較しなければ明らかにはできないが，文書の種類による差異については，ヒントがあるかもしれない。

「造文字暦書」において借義字は，二句目の三番目の語「去」，三句目の一番目の語「成」，五番目の語「忐」四句目の一番目の「語「成」，五番目の語「忑」である。祭文の様式（押韻のルール）に従えば，二句目の三番目の語「去」は，一句目の五番目の語「開」と韻 a:i を踏んでいなければならない。「去」は a:i 音を持つものでなければならないのだ。漢語の「去」の発音は k^hi̯ab（上古音）あるいは hɵy（粤語）なので，「去」は漢語でなく壮語で pai^1 と発音すべきとわかる。

同様に，三句目の五番目の語「忐」も四句目の三番目の語「閔」$mɯn^6$ と韻を踏まなければならないので，漢語の発音である $l̥^h$u:mʔ（上古音）あるいは t^ha:n（粤語）ではなく，壮語で $kɯn^2$ と発音することがわかる。

「忑」については，三句目と四句目が対表現になっていることから，「忐」と対をなす壮語 la^3 となるだろうと推察できる。

「成」については漢語発音か壮語発音かを推察する術がない。にもかかわらず，祭文である「造文字暦書」は，語の読みについては心配しなくともよい。祭文は師匠によって繰り返し誦習される。初学者であっても師匠から個々の語の発音を学ぶことができる。

「梁山伯祝英台」は歌本である。師匠と共に誦習に励むものでもないし，祭文よりも多くの人々の目に触れるものでもある。できることなら，語の意味を押韻から推察せずとも，初見でも発音できることが望ましい。形声字を使用すれば意味も音も伝えることができる。

山と書くな

私は蒋宏の発した壮語の言葉「ビャー（pja_1）をヤマのつもりで山とノートに書き，叱責された。「ビャー」を「山」と書く行為は日本の言語文化（訓仮名）に特有のものではなく，漢字文化圏の非漢語使用者に見られる行為（借義字）である。「造文字暦書」でも pai^1 を表すのに「去」を使用していることから，壮語でも借義字があることは明白である。

にもかかわらず蒋宏は借義字を使うことを認めない。「山というのは漢族のところにあるものだ。あなたも登ったことのある泰山は山だ。ここらあたりにあるものは，それとはちがう。それを山と書くことはできない」からである。

泰山は道教の聖地であり漢族文化の象徴的な存在である。近くの村の背後にあるビャーは，泰山に代表されるような宗教と文化を背負った山ではない。そういう高さと深さを持ち得ないものだ。ビャーと山を同じように扱うことはできない。同じ文字で表現するのは不適切だと，蒋宏は考えたのだろう。

蒋宏はビャーを山と書くことはない。同じように「山」と書かれた字をビャーと読むことはない。高さと深さのある山である大明山のような山のことを蒋宏は「土山」という。

沖森は山を＜やま＞とよむことについて次のように言う。「漢字は表語文字であるから，その字義には自ずから和語が対応しうる。「山」は，〈やま〉の意であるから，「山」を和語で「やま」と解釈することができる。」（沖森 2009 p.193）

漢字は表語文字であるから，漢字一字は漢語の意味と音を持っている。意味については在地の言葉で解釈（翻訳）してもよい。私の育った言語文化ではこのように考えている。私の在地が日本から広西に異動しても，私はこのルールのうちにあった。ビャーと聞いて意識することなく「山」と書いた。「山」と書いてあるものをビャーとよむことにも躊躇はない。ビャーと「山」の違いが捨象されていることに気づきもしない。

これを推し進めると，「鮎（あゆ）」や「柏（かしわ）」といった国訓となる。漢語では「鮎」はナマズという意味を持つが，和語では「鮎」はさけ科の小魚のことである。ナマズもアユも淡水魚であるが，見た目も生態も異なっている。漢字の意味を在地の言葉で解釈する際に，間違った解釈をしてしまい，それが定着してしまった例である。国訓は，山をビャーとよむことのできない蒋宏にとっては，あり得ない事態である。

日本語の言語文化では，表語文字である漢字に音と意味が一対になっていることを求めた。その

一方で，意味については在地の言葉で解釈してもよいと考えた。翻訳であるから，ある程度の齟齬は仕方ない。あきらめと割り切りである。

壮語の言語文化においても，漢字に音と意味が一対になっていることを求めた。ただし，漢字の示す意味と壮語の示す意味にズレが生じた場合は, 漢字を捨て, 意味と音が過不足なく一対となっている新しい字を創るべきだと考えた。形声字の誕生である。

「造文字暦書」は借音義字, 借音字, 借義字によってほぼ構成されている。この構成は日本の古代の漢字，万葉音仮名，万葉訓仮名による構成に近いものである。「梁山伯祝英台」は借音義字, 借音字, 形声字で構成されている。これは日本にはない表記の形である。一見すれば,「梁山伯祝英台」は, 漢字だけを使って書かれた日本の古代の文献に似ているようにみえる。しかし文字表記という観点から見れば，異なる位相にあるものである。

漢語を母語としない者同士が漢語の表語文字である漢字「山」を共通して理解していたとしても，個々の民族文字との関わりにおいて,「山」を共通して理解することは難しい。蒋宏がぷいと部屋を出て行ったのは，そのあらわれである。

おわりに

漢字系文字には，①漢字をそのまま使用する段階，②新しい文字をつくる段階，③別系統の文字を使用する段階がある（河野 1994）。かつて日本語と壮語は漢字文化圏のなかにあって，共に漢字をそのまま使用する段階にあった。日本では漢字, 万葉仮名を使用していた時代，壮語では「造文字暦書」に先立つ世界である。「梁三伯祝英台」はそこからテイクオフして，漢字の構造原理を利用して新しい文字（形声字）をつくるに至った。

古壮字の形声字は一字で意味と音を過不足なく表すことのできる文字である。しかしその一方で欠点も抱えていた。字数の多さである。『古壮字字典』に収集されている古壮字は, 親字が 4918 字, 異体字を含めた総字数は 10700 字である。古壮字には先に挙げたように，象形，会意，指示，形声，借音，借義，借形，借音義の類型があるが，そのなかで最も字数が多いのが形声字である。『壮族古籍文字』（蒙 2016）は，古壮字においても形声字の割合は 90 パーセントを超えているとみている。

古壮字の形声字は，漢字と壮語の示すものの間に，意味や音において差異が発見されると，造字されるものである。従って，漢族との文化接触が増えるにつれ，古壮字の形声字が増えていくことになる。これが古壮字の数量の多さの要因である。

壮語の方言は，大きく南北の二大方言区に分かれ，さらに十二土語区に分かれている。地域ごとの土語の違いは，主としてと語音と単語の違いにある。そのような状況において，古壮字の形声字は音の再現性を重要視している。例えば *Mapping the Old Zhuang Character Script*（Holm 2013）は，古壮字の地域分布を論じたものであるが，木を表す古壮字として，19 種類の字（うち半数以上が形声字）を挙げている。語音が違えば，例え意符において同じ漢字を用いていても，音符において異なる漢字を使わざるを得ない。このことも古壮字の字数を増やす要因となっている。

さて日本も壮語と同じように，①漢字をそのまま使用する段階から，②新しい文字をつくる段階へテイクオフしたが，その文字は漢字を変形させてその民族語に適応させたもの（仮名）となった。テイクオフに先立って，漢文を訓読できる能力を得たこと，訓仮名を用いて和文を書けるようになったことが，後の飛躍に大きく貢献したと考えられている。

「古事記はよめるか」（亀井 1985）で指摘されたように，訓仮名を用いて書かれた古事記の散文は「ヨメなくてもよめるかき方」で記述されていた。日本語の言語文化は，いささか力業ではあったけれど，漢字を飼い慣らすことに努力を重ね, 片仮名平仮名を生み出すと，やがて，今昔物語において，散文体を獲得する。音仮名を用いて記述してきた韻文とも訓仮名を用いて記述してきた散文とも異なる文体を得たのである。

他方，現存する古壮字文書には散文体のものは

ない。

注１　1957 年に制定されたアルファベット表記の壮語の書き言葉。1982 年に修訂された。
注２　うたう時には五言十二句の詩であるが，それを文字で書く時には五言八句で書く壮歌を「十二行勒脚歌」という。広西の北部方言区域で最も広くうたわれているものである。
注３　粤語　広東広西地域で主として使用される漢語の方言。粤語の最も有力な方言は広州で使われる広州語（広東語）である。壮語と粤語の関係は密接である。壮語に取り入れられた漢語のうち，早くに取り入れられた漢語は粤語由来のものである。またさらに時代を遡ると，粤語と壮語が未分化であった時期があったとされる。

参考，引用文献

沖森卓也『日本古代の文字と表記』吉川弘文館　2009 年
大西克也他『アジアと漢字文化』放送大学教育振興会　2009 年
亀井孝『亀井孝論文集 4』吉川弘文館　1985 年
亀井孝他『日本語の歴史 2　文字とのめぐりあい』平凡社　2007 年
河野六郎『文字論』三省堂　1994 年
神野志隆光『漢字テキストとしての古事記』東京大学出版会　2007 年
手塚恵子「古壮字による梁山伯祝英台Ⅰ―壮族に伝承された怪異物語」『人間文化研究』（第 30 号）京都学園大学人間文化学会　2013 年
手塚恵子『中国広西壮族歌垣調査記録』大修館書店　2002 年
西田龍雄『漢字文明圏の思考地図』PHP 研究所　1984 年
西脇隆夫「『粤風』俍僮歌の使用文字について」『中国語学』230 号　1983 年
平川南他『文字と古代日本 5　文字表現の獲得』吉川弘文館　2006 年
矢田勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院　2012 年
范成大『桂海廬衡志』一巻（国会図書館デジタルコレクション http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2557664?contentNo=8）
何思源『壮族麽经布洛陀语言研究』中国社会科学出版社　2013 年
胡仲実『壮族文学概論』広西人民出版社　1982 年
黄体栄編著『廣西歴史地理』広西民族出版社　1985 年
京海林他『石语墨影 广西古代石刻选萃（Chinese Edition）Kindle 版』广西对外文化传播中心　2014 年
李調元輯「粤风」『廣州大典』広州出版社
李調元輯　梁庭望譯注『粤風・壮歌譯注』広西民族出版社　2012 年
劉淑新『粤語壮傣語問題』商務印書館　2006 年
蒙元耀『壮族古籍与古文字』广西民族出版社　2016 年
欧陽若修等『壮族文学史』広西人民出版社　1986 年
覃国生『壮語概論』広西民族出版社　1998 年
覃晓航『方塊壮字研究』民族出版社　2010 年
史金波，黄潤華『中国歴代民族古文字文献探幽』中華書局　2008 年
陸祚蕃「粤西偶記」閔叙輯, 陸祚蕃著『粤述　粤西偶記』（広西壮族自治区図書館蔵）
韋星朗『漢壮翻訳概論』広西民族出版社　1992 年
張声震他『壮族麽经布洛陀影印譯注』広西民族出版社　2004 年
David Holm *Mapping the Old Zhuang Character Script* Brill 2013
少数民族古籍整理出版規划領導小組『古壮字字典』広西民族出版社　1989 年
Bernhard Karlgren *Analytic dictionary of Chinese and Sino-Japanese* Paul Geuthner 1923
漢字古今音資料庫　http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/#
漢字音韻字典　http://jf.xmu.edu.cn:8085/
粤語国際音標査詢　https://open-dict-data.github.io/ipa-lookup/yue/#